

創価グロリア吹奏楽団 第36回 定期演奏会



SOKA GLORIA
WIND ORCHESTRA
36th Annual Concert

2023年 6月25日 日

府中の森芸術劇場 どりーむホール

15:45開場 / 16:30開演



本日は、創価グロリア吹奏楽団 第36回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

本公演はゲストに、春日部共栄高等学校吹奏楽部を招待させていただきました。同校吹奏楽部をはじめ、協力いただいた学校関係者、保護者の皆さまに御礼申し上げます。

コロナ禍が少し落ち着いたとはいえ、まだ予断を許さない状況下でありながら、緊迫した世界情勢も続いております。その中において音楽、文化の力はどれだけ人類の勇気と希望になるか。

「聴いてくださる方々に勇気と希望を与える。」
私たち創価学会音楽隊は、この使命を忘れず、楽団員一同、これからも感謝を胸に、人格、技術ともに更なる向上を目指して参ります。

最後に、日頃から渾身の指導をしてくださっている小澤俊朗先生、中村睦郎先生、講師の先生方、また本日も来場くださった皆さま方を始め、応援くださる皆さまに心より御礼申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

本日は最後まで、ごゆっくりとお楽しみください。



創価グロリア吹奏楽団

SOKA Gloria Wind Orchestra

創価学会音楽隊の中央楽団として、「音楽隊第一吹奏楽団」の名称で発足。1980年に「創価学会東京吹奏楽団」と改称。1997年に第45回全日本吹奏楽コンクール（主催：全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社）に出場を果たし、金賞を受賞。同年11月1日に、「創価グロリア吹奏楽団」へと改称。その後、2000年に2度目となる金賞を受賞し、昨年2022年に至るまで、全国大会にて通算15度の金賞を受賞している。

定期演奏会やファミリーコンサートの開催、イベントへの出演やレコーディングなど広範な活動を続け

ており、東日本大震災の被災地支援の活動として、2011年5月には千葉県旭市で「復興応援コンサート」、2013年4月には福島県南相馬市にて「福光の春コンサート」を開催。

2014年からは、さらなる継続的な活動として「希望の絆コンサート」を、岩手県（大船渡市・釜石市・宮古市・盛岡市）、福島県（福島市・須賀川市）、宮城県（多賀城市・石巻市・名取市・富谷市・仙台市・栗原市・大崎市・黒川郡大和町、大郷町）にて開催。2018年には熊本地震の復興支援活動として、熊本県（熊本市・宇土市・菊池郡菊陽町）で開催した。楽団員は、首都圏に在住する青年メンバーで構成されている。



常任指揮 中村 睦郎

Mutsuo Nakamura

1967年山口県下関市出身。1990年、国立音楽大学音楽学部器楽科（ユーフォニアム専攻）を首席卒業。矢田部賞受賞。

1990年から18年間にわたりシエナ・ウインド・オーケストラユーフォニアム奏者として活躍し、2008年に同楽団を退団後は指揮者として新たな道を歩み始めた。2015年より東京音楽大学指揮科にて指揮を学ぶ。

全日本吹奏楽コンクールにおいて金賞を20回以上

受賞。2013年には全国大会出場15年となり、全日本吹奏楽連盟より長年指揮者賞を授与された。

これまでに仙台クラシックフェスティバル、A.リード没後10年記念「リード×シエナ」演奏会、ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン2017、フレンズ・オブ・ディズニー・コンサート2019等に出演し好評を博す。2016年に「リード×シエナ」のライブCDが（株）ソニー・ミュージックエンタテインメントよりリリースされた。

ユーフォニアムを三浦徹、吹奏楽を小澤俊朗、指揮を広上淳一、田代俊文の各氏に師事。

現在、創価グロリア吹奏楽団常任指揮者。



司会／吹奏楽作家 オザワ部長

Ozawa bucho

世界でただひとりの吹奏楽作家。神奈川県横須賀市出身。早稲田大学第一文学部文芸専修卒。大学在学中は芥川賞作家・三田誠広に師事。

2023年3月に初の小説『空とラッパと小倉トースト』(Gakken)を上梓。著書は『吹奏楽部バンザイ!! コロナに負けない』(ポプラ社)、『吹部ノート』(KKベストセラーズ)、『美爆音!ばくらの青春シンフォニー 習志

野高校吹奏楽部の仲間たち』(岩崎書店)、『旭川商業高校吹奏楽部のキセキ 熱血先生と部員たちの「夜明け」』(Gakken)など20冊以上。

朝日新聞に「My 吹部 Seasons」を、クラシック情報誌『ぶらあぼ』に「ぶらあぼプラス!」を連載中。

2023年7月に『吹奏楽部バンザイ!! コロナに負けない』が水戸市民会館開館記念事業として舞台化(演出・深作健太、脚本・井上桂)。テレビ・ラジオ出演、司会など幅広く活躍中。

吹奏楽部時代はサクソフォン担当。



春日部共栄高等学校吹奏楽部

Kasukabe Kyohei Senior High School Wind Orchestra

1981年、部員1名で創部。学校のモットーである「文武両道」を実践しながら、吹奏楽コンクール、定期演奏会をはじめ、公的行事での演奏、海外での演奏など、幅広い音楽活動を行っている。

吹奏楽コンクールでは、2000年以降17回の全日本吹奏楽コンクール出場、金賞を5回受賞している。

海外へはこれまでに、ハワイで開催された環太平洋音楽祭に5回出場し、グランプリを3回受賞。1992年には米国カリフォルニア指導者協会の招待によって、サンフランシスコ、ロスアンゼルス等で演奏を行い、春日部市の音楽使節として姉妹都市のパサディナ市で演奏や交流を行う。2007年に、シドニーのオペラハウスで開催されたオーストラリア国際音楽祭に出場し、金賞を受賞。2011年には、カーネギーホールで開催されたニューヨーク音楽祭に出場し、金賞を受賞した。

指揮 織戸 祥子

Shoko Orito



春日部共栄高等学校出身。在学中は吹奏楽部に所属し、前顧問の都賀城太郎氏の指導のもと、サクソフォンプレーヤーとして全日本吹奏楽コンクールに出場。

卒業後は国立音楽大学に進学し、サクソフォンを雲井雅人氏に師事。2013年に春日部共栄中学校に赴任し、2015年からは春日部共栄高等学校吹奏楽部の顧問として指導に務める。





第1部 創価グロリア吹奏楽団ステージ

指揮: 中村 睦郎
Mutsuo Nakamuraアルヴァマー序曲
*Alvamar Overture*作曲: J.バーンズ
James Barnes陽はまた昇る
*The Sun will rise again*作曲: P. スパーク
Philip Sparkeマードックからの最後の手紙 (2021年版)
*The last letter from Murdoch 2021*作曲: 樽屋 雅徳
Masanori Taruya交響曲第1番「悪魔の聖書」より
*Symphony No. 1 "Codex Gigas"*作曲: J. デイヴィッド
James David

—休憩—

第2部 春日部共栄高等学校吹奏楽部ステージ

指揮: 織戸 祥子
Shoko Oritoディズニー・メドレー
*Disney Fantasy*編曲: 岩井 直溥
arr. Naohiro Iwaiムーンライト・セレナーデ
*Moonlight Serenade*作曲: G.ミラー / 編曲: 岩井 直溥
Glenn Miller / arr. Naohiro Iwaiシンフォニエッタ第3番「響きの森」
*Sinfonietta No.3 "Distance of Sounds"*作曲: 福島 弘和
Hirokazu Fukushima

—休憩—

第3部 合同演奏ステージ

指揮: 中村 睦郎、織戸 祥子
Mutsuo Nakamura / Shoko Orito行進曲「煌めきの朝」
*Concert March "Bright Morning"*作曲: 牧野 圭吾
Keigo Makinoポロネーズとアリア ～吹奏楽のために～
*《Polonaise and Aria》 for Wind-Brass Ensemble*作曲: 宮下 秀樹
Hideki Miyashitaピース、ピースと鳥たちは歌う
*Peace, Peace, so Sing the Birds*作曲: 伊藤 康英
Yasuhide Ito



— 第1部 —

アルヴァマー序曲

ジェイムズ・バーンズ。吹奏楽経験者であれば、知らない人はいないというほど有名なアメリカの作曲家です。これまでに9つの交響曲のほか、吹奏楽のための作品を数多く作曲しており、親しみやすい旋律ながら、シンフォニックな響きを持つ楽曲が多いのが特徴的です。

そんな彼の作品の中でも抜群の人気を誇るのが、この〈アルヴァマー序曲〉。1981年にカンザス州ウィチタで行われた音楽祭において、参加した公立中学校の選抜吹奏楽団と指揮者のために作曲されました。近年では、「ポケットモンスター スカーレット & バイオレット」の予告映像BGMとして採用されたことでも話題となっております。

曲は、明るく快活な序奏から始まり、伸びやかな旋律による第一主題へと続きます。中間部は、トランペットや木管楽器による美しい旋律が、伴奏の温かなハーモニーに乗って奏でられ、中間部が終わると打楽器の誘いにより冒頭が再現されます。クライマックスでは、木管楽器による第一主題を変形した速いパッセージとともに、金管楽器により中間部の旋律が感動的に奏でられます。

なお、題名の「アルヴァマー」は、バーンズ氏がよく訪れた、カンザス州ローレンスにあるゴルフ場の名前にちなんだものと言われています。爽やかな青空の下で、ゴルフを楽しむ作曲者の姿が目浮かぶようです。

(戸田 光彦)

陽はまた昇る

忘れもしない2011年3月11日。東日本大震災によって日本中の多くの人々が甚大な被害を受けました。

当時の様子は報道を通じて全世界の人々にも大きな衝撃を与え、誰もが心を痛めました。イギリスの作曲家、フィリップ・スパークもその一人です。親しい友人がたくさんいる日本で起きた災害は、スパークにも大きなショックを与え、友人である西田裕氏の「この大地震によって被災した方々を元気づけるために、何か楽曲を書いて貰えないか」との提案から作曲に取り掛かり、〈THE SUN WILL RISE AGAIN〉(陽はまた昇る)が完成しました。

本来この楽曲は〈カンティレーナ〉というブラスバンド曲から吹奏楽用に編曲し、「日出ずる国」に敬意を表して新しい曲として生まれた楽曲です。

この楽曲は出版印税を含め、販売収益は全て日本赤十字社の緊急救援基金へ寄付されています。

東日本大震災から10年以上経った今も、復興を願い、吹奏楽を愛する人々によって、各地で数多く演奏されている一曲です。

(平岡 勇一)

マードックからの最後の手紙(2021年版)

吹奏楽コンクール等でたくさんの方々に演奏されているこの曲ですが、玉名女子高等学校吹奏楽部の委嘱によって作曲者の樽屋雅徳氏が加筆改訂をし、2021年のコンクールにて初演されました。

タイトルにあるマードックとは、海難事故によって沈没したタイタニック号に一等航海士として乗船しており、船が沈む最後の瞬間まで勇敢に乗客の救出にあたった乗組員の一人です。彼は航海中、家族に手紙を書くのが日課でした。そこには自身の近況はもちろん、家族を気遣う思いが必ず綴られており、そんなマードックの「最後の手紙」には、どんな内容が認められていたのでしょうか。乗客達で賑わう船上の様子や大西洋の美しい眺め、そして事故を予感させるアクシデントについて、語られていたかもしれません。この曲には、その手紙に綴られていたであろう風景や彼の思いを、アイルランドで伝えられてきた民族音楽、アイリッシュ調のメロディーで描いています。マードックからの最後の手紙を「読む」ように聴いていただけたらと思います。

(明石 光司)

交響曲第1番「悪魔の聖書」より

アメリカの作曲家、ジェイムズ・デイヴィッドによって2019年に作曲されました。日本では2021年に昭和音楽大学ウィンド・シンフォニーによって初演されております。

本曲の作曲には約1年半もの期間を費やしたとされており、“偽りと混乱の時代が意味するものの重要性を探るころみ”を表現することに着目し、デイヴィッドは次のコメントを残しています。

「21世紀は技術と科学において人類は大きな成果をもたらした。しかし誤った情報の台頭やパノライア(妄想症)が不穏に増加していると見受けられる。私が初めて作る交響曲は、現代に対する様々な欲求不満と恐怖に対処しようと、過去の様々な傑作から素材を得て発想の基とした。」

さて、その発想の基となったものとは何でしょう。デイヴィッドは2つの題材を挙げています。

第1の題材は『悪魔の聖書(ギガス写本)』と呼ばれるものです。これは長さが約1メートル、重さはなんと75kgという巨大(Gigas)な写本であり、中世の写本として現存する世界最大の写本です。その内容は全てラテン語で書かれ、聖書やキリスト教における



歴史的書物が手書きで写本されており、書中に悪魔のイラストがあることで有名です。このイラストが人々の印象に強く残り、「悪魔の聖書」と呼ばれるようになりました。当時の中世には印刷機はなく、本の制作は修道院の仕事の一つでした。当時、戒律を破り幽閉されていた1人の修道士が、減刑をしてもらうためにこの写本を一晩で完成させると誓いを立てましたが、真夜中になって不可能であることを悟り、神ではなく悪魔に次のような祈りを行いました。「自身の魂と引き換えに、この本を完成させてくれ」と。この願いを受けたルシファー（キリスト教における悪魔＝サタン）の別名）が力を貸し、この写本を完成させたという伝説が語られています。

悪魔のイラストは、その修道士が悪魔に感謝の意を表すために記載したと語られています。しかしながらこの写本は悪魔が書いたと言われるものの、内容そのものは聖書であり、神と悪魔という、相対する存在の意味を問い、デイヴィッドはこの交響曲を構成するコンセプトとして、善と悪、光と闇等といった相対するものとの対比を曲の中にさまざまな形で配置する構成を取ったのです。

第2の題材は、チェコ生まれのアメリカの作曲家、カレル・フサが作曲した〈プラハ1968年のための音楽〉、〈この地球を神と崇める〉を題材としています。

〈プラハ1968年のための音楽〉は1968年にソビエト軍がフサの故郷であるプラハへ侵攻したことへの抗議として作曲をされ、15世紀にボヘミア（現在のチェコ）のフス派教徒によって歌われていた、〈汝ら、神とその法の戦士たち〉という讃美歌が作曲の題材として用いています。もう1つの〈この地球を神と崇める〉では、人類が直面するさまざまな問題——戦争や飢餓、種の絶滅、環境汚染などがその動機となり作曲されたことを踏まえ、デイヴィッドはこの2曲を本曲の発想の基としたそうです。

この交響曲は4楽章で構成され、それぞれ「オルガナム/シャコンヌ/トッカータ/コラール」という伝統的な音楽様式を用いていますが、本公演では3つの楽章を抜粋したダイジェスト版をお送りします。

本曲の演奏が、単なる吹奏楽傑作の表現ではなく、作曲家デイヴィッドが伝えたい現代社会への強い思いや、宗教や思想による争い、格差や貧困、環境破壊、そして悲惨な戦争が起きているこの現代において、混沌とした社会に全世界共通の言語である「音楽」でしか伝えられない平和・安穩のメッセージがあると信じ、演奏いたします。

(佐久間 大毅)

— 第2部 —

ディズニー・メドレー

春日部共栄高等学校吹奏楽部のステージ、1曲目に演奏いたしますのは、吹奏楽ポップスの父として親しまれた岩井直溥氏による編曲の〈ディズニー・メドレー〉です。

子供にも大人にも夢を与えてくれるディズニーの名作映画の中から、7曲がメドレーになっています。ミュージカルのオープニングを思わせる雄大なイントロダクションで始まり、〈ミッキー・マウス・マーチ～小さな世界～ハイ・ホー～狼なんかこわくない～いつか王子様が～口笛吹いて働こう～星に願いを〉が様々な音楽スタイルに変化して曲が展開されていきます。シンフォニックな響きと、所々に出てくる小物打楽器によるコミカルな効果音もこのアレンジの魅力です。

高校生による夢と希望に溢れるディズニーサウンドを皆さまにお届けします。

ムーンライト・セレナーデ

この曲は1939年にトロンボーン奏者のグレン・ミラーにより作曲されたスウィング・ジャズの代表曲です。作曲当初は全く流行しなかったのですが、当初の曲よりテンポをスローにし、ミッチェル・パリッシュが歌詞をつけ、フランク・シナトラなどが歌ってヒットし、その後も様々なアレンジが有名アーティストたちによって次々発表され、今では世界的に愛される名曲となりました。歌は以下のような、愛する人を思い歌う夜想曲です。

私は君の家の戸口に立って月の光を歌う
私は6月の夜に君が手を差し伸べてくれるのを待つ
薔薇はそっとため息をつく
ムーンライト・セレナーデ

この曲も〈ディズニー・メドレー〉と同様、岩井直溥氏による吹奏楽アレンジです。原曲のムーディさを生かしながらも、途中にはベートーヴェンの〈月光ソナタ〉が顔を出すユーモラスな構成になっています。

シンフォニエッタ第3番「響きの森」

2010年に春日部共栄高等学校吹奏楽部が作曲家の福島弘和氏に委嘱したシンフォニエッタ第2番「祈りの鐘」に続いて、2018年に東海大学高輪台高等学校吹奏楽部の同氏への委嘱によって



発表されました。さらにこのシリーズは、現在までに第5番まで続いており、多くの吹奏楽ファンが注目するシリーズとなっています。

響きの森の英訳は“Distance of Sounds”とされており、標題がついた音楽とはいえ、どこかの具体的な森を表現した作品ではなく、音と音が響き合う様子が、木と木が生い茂って森のように聞こえることをタイトルにしている作品です。

冒頭に提示される木管楽器の主題が音程やリズムを変化させながら広がっていく様子を、本日はここ「府中の森」いっぱい響かせます。

— 第3部 —

行進曲「煌めきの朝」

この曲は2023年度の全日本吹奏楽コンクールの課題曲となっている1曲です。作曲者の牧野圭吾氏は、高校2年の頃から作曲を始め、この曲は2作品目になります。

中学生の入学式、体育館の扉が開いた時に聞いた、真島俊夫編曲〈宝島〉の高揚感。毎朝自転車を通る通学路の中島公園にある池に光る水面の様子。曲名の〈煌めきの朝〉にはこうした思いが乗せられていると作曲者は語りました。

課題曲マーチの形式に則っていますが、思いきった転調やシャープ系の和音の使用など様々な挑戦をされており、メロディだけが主役ではなく、時には伴奏にもスポットライトを当て、奥行きのある高揚感を感じられる曲です。

17歳という若さで書かれたからこそ、中学生、高校生の年代が真剣に吹奏楽に取り組む姿を曲に表せることができる。若く強い活力的な雰囲気をお楽しみください。
(岡田 恭輔)

ポロネーズとアリア ～吹奏楽のために～

この曲も2023年度全日本吹奏楽コンクールの課題曲となっている1曲です。作曲者である宮下秀樹氏は、2021年度の課題曲〈吹奏楽のための「エール・マーチ」〉も作曲しております。

ポロネーズやアリアと聞くと、ゆったりとした曲調をイメージされる方もいるかと思いますが、この曲はテンポも少し早く、どことなく荒々しく聞こえる場面も登場します。そこには、目まぐるしく変わっていく社会に対して、正義や勇気、恵愛、慈悲、希望、平和などの本質は変わらないはずだという、作曲者の思いが込められております。

曲名の通り、ポロネーズとアリアという2つの要

素でこの曲は構成され、印象的な3連符のリズムと、緩急のついたリズムの移り変わりがあり、冒頭の金管のメロディや、中盤以降で登場する各楽器のソロなど、豪華で煌びやかな演奏をお楽しみください。
(北野 大志)

ピース、ピースと鳥たちは歌う

The birds in the sky, in the space, sing, "peace, peace, peace" (鳥たちはこの空で、この空間で、Peace, Peace, Peace〈平和、平和、平和〉と歌うのです)

1971年10月24日、カタルーニャ出身のチェロ奏者であるパブロ・カザルスは国連にて行われた演奏会にて、このようにスピーチをした後、カタルーニャ民謡「El Cant dels Ocells(鳥の歌)」を演奏しました。

当時カタルーニャはスペイン本国の同化政策によって弾圧を受けており、1936年に起きたスペイン内戦をきっかけにカタルーニャ語の使用等も禁じられました。その後カザルスはフランスへと亡命をしますが、カタルーニャ人としての誇りを捨てることなく、世界の平和と安寧への願いを込めてカタルーニャの古くからの民謡である「鳥の歌」を演奏したのでした。

この曲は全編を通して、この「鳥の歌」の主題が使われています。冒頭はオーボエとトロンボーンのソロ、またクラリネットなどの木管群などによってこの主題が歌い継がれていきます。しかしそれは、暴力的な雑踏や喧騒をイメージした演奏によってかき消されてしまいます。まるで、平和を願う者たちとそれを阻む者たちとの戦いを表すかのように。それでも鳥の歌が鳴り止むことはありません。やがて、平和を願う金管楽器のファンファーレが鳴り響き、それは次第に仲間を集め大きな力となって前進していきます。平和を目指す行進は鳥たちの鳴き声と共に、歩みを進め、それは鳥の歌が鳴り響く世界へと突入していきます。そして、ついに平和を勝ち取った凱歌を響かせながら壮大なフィナーレを迎えるのです。

この曲は、2001年に当団が伊藤康英氏に委嘱し、同年の定期演奏会にて演奏された「平和と栄光」が原曲となっており、当初の大編成版から通常の編成でも演奏できるようにと2018年、創価大学パイオニア吹奏楽団の委嘱によって作り直されました。

「21世紀が平和の世紀となるように」との願いが込められた作曲者の思いも乗せ、いまだ戦禍が絶えないこの世界に平和をとの祈りを込めて演奏いたします。
(櫻井 優)